

急激な環境変化における検査技師の適応とレジリエンスの考察

◎岡部 寛央¹⁾、山口 千佳¹⁾、尾方 一仁¹⁾、草野 瞳士¹⁾、山口 真希¹⁾、川内 匠¹⁾、篠原 弘文¹⁾
長崎労災病院¹⁾

【はじめに】

近年、当院検査部の職場環境は急激かつ多面的に変化している。主な要因は、世代交代、新型コロナウィルス感染症の流行、病院経営の厳しさである。こうした望まぬ変化やストレスに直面する機会が増え、安定した環境に慣れていた職員にとっては適応が困難な状況が生じている。この環境を乗り越えるには、変化に柔軟に適応する力、すなわち「レジリエンス」が極めて重要である。本演題では、当院検査部における変化の経緯と、それに伴い私が経験した業務の変遷について報告し、得られた考察を示す。

【病院・検査部の変化】

2020年：新型コロナウィルス感染症の流行により、微生物検査部門の業務量が増加し、技師を増員した。

2023年：乳腺エコーの導入に伴い、検体検査部門から生理検査部門へ異動。検体検査部門の疲弊化により、検体検査と微生物検査の一体化が進行した。

2025年：病理検査部門の技師の予期せぬ退職。病床数削

減により技師定数も減少し、人員補充も困難となり、検体・微生物検査部門からの支援体制を確立した。

【私自身の業務の変遷】

微生物検査部門の増員に伴い、病理検査部門から異動した。その後、検体検査と微生物検査の一体化が進み、細胞検査士としての資格を活かし、一般検査の兼務も開始。また、病理検査部門の技師減少により、再び病理検査も兼務し、現在は微生物・一般・病理検査の3部門を担当している。

【まとめ】

検査技師は一般的にスペシャリスト・ジェネラリストに大別されるが、その前提として、職場の状況を的確に把握し、率先して業務を担い、円滑に遂行できる「レジリエンス」を備えた人材が極めて重要であると考える。私はまだスペシャリスト・ジェネラリストいずれの領域にも至っていない中堅技師であるが、職場の安定化に貢献し、若手技師の模範となるよう努めていきたい。

連絡先：長崎労災病院 中央検査部 0956-49-2191